THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 36

March 2016

京都大学総合博物館
ニュースレター

発掘された弥生前期の水田遺構（北東から）・吉田南構内・1994 年
（2 ページに関連記事）

特別展「文化財発掘 II」.....2
特別展「ねむり展」.....3
京都大学研究資源アーカイブ映像ステーション一時閉館.....3
「歴史の里」シンポジウム「志段味大塚古墳の副葬品の調査・研究」.....4
戦後 70 年特別展「人間らしく、戦争を生き抜く」.....4
特別展「京のイルカと学びのドラマ」付帯事業.....5
第 5 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム.....7
タイ王国におけるワークショップ「陸上脊椎動物の野外調査」.....8
SPIRITS 国際シンポジウム「京都大学の埃及考古資料」.....9
「総合」博物館と異分野交流.....10
外国人研究員.....11
総合博物館日誌（平成 27 年 11 月～平成 28 年 2 月）.....13

平成 27 年度特別展

文化財発掘Ⅱ－京大キャンパスの弥生時代－

開催期間：2016 年 2 月 10 日（水）～ 4 月 17 日（日）

京都大学吉田キャンパスのほぼ全域には，大学設置にいたるまでの各時代の遺跡が埋蔵されている。このフィールドを活かし，文化財総合研究センターは，発掘調査という臨床的な活動を基盤に，調査技術や研究方法の開発，資料の保管や活用について総合的な実践を行っている。構内遺跡の概略や組織の沿革については，昨年度の特別展「文化財発掘－京大キャンパス出土の埴輪－」を紹介する本誌（ニュースレター No.33，2015 年３月）に記されているところである。

今回の特別展では，吉田キャンパスにおける弥生時代遺跡に焦点をあてた。展示の柱は３つある。ひとつは，吉田南構内と北部構内で見つかっている弥生前期の水田である。畔で小さく区切られた水田が，洪水による厚い砂の堆積にそのまま埋もれていた。とくに吉田南構内では，田面の凹凸が著しい北半と，凹凸のない南半という特徴の異なる水田域が隣り合い，当時の耕作過程のある段階が鮮やかに残されている。また，同時期の土器や石器が多く出土する周辺の地点は，水田を営んだ人々の集落に相当すると推測している。展示では，発掘データにもとづいた当時の地形復元を示しつつ，写真や映像により発掘された水田を紹介するとともに，その時期の出土資料を陳列した。この地で人々がどのように土地を拓き稲作をはじめていったのか，しばし思いを馳せていただければ幸いである。

もうひとつは，その水田を一瞬で埋めた洪水である。現在は吉田山の東を南流している白川に由来し，北部構内では２ｍ近い砂層に多数の巨礫が含まれるなど，土石流と呼べる様相が検出されている。吉田南構内でも１ｍ程度堆積し，広くこの地を襲い地形を一変させる災害であったろう。発掘では，この砂層の上から弥生中期初めころの遺構が見つかるので，洪水が前期～中期の間の出来事とわかる。それにより，吉田キャンパス一帯の広域で同時性の指標となる堆積層（鍵層）としても活用される。例えば，地震による地盤変化の跡も構内の発掘で検出されるが，この鍵層である砂層を貫いて吹き上がる噴砂は，弥生中期以降の地震によるもの，と判断できる。今回，それを示す地層断面の剝ぎ取りを展示した。洪水や地震などこの地に生じた過去の災害を視覚的に感じていただければと思う。

弥生前期水田の調査風景 (吉田南構内)

弥生中期の土器 (吉田南構内出土)

３つめは，弥生中期の墓地である。砂層の上からは，溝で方形に区画した方形周溝墓と呼ばれる遺構が複数見つかっている。被葬者が葬られた部分は削られて無くなっていたが，周囲を囲む溝内からは多数の土器が出土した。壺・甕・高杯・水差といった各種類があり，器形や文様には周辺各地の特徴を認めることができる。また，底部や胴部を意図的に穿孔したものも含まれる。2000 年をさかのぼる当時の人々の生活様式や交流圏，葬送観念といったものがうかがえる興味深い資料群を，この機会にじっくりご覧いただきたい。

今回の展示にあたり，企画段階より総合博物館にはひとかたならぬご協力をいただいた。末尾ながら，関係各位に厚くお礼申し上げたい。

（文化財総合研究センター助教　伊藤淳史）

平成 28 年度特別展

ねむり展 ―眠れるものの文化誌―

開催期間：2016 年 4 月 6 日（水）～6 月 26 日（日）

人の眠りは本能のひとつとされています。眠ることは，お腹が空くことと同じように，人としてあたりまえの欲求にもとづく行動なのです。しかし，現代社会に生きる私たちにとって，眠りは常に大きな関心事となってきました。眠りにさまざまな問題をかかえている人も少なくありません。

「ねむり展」は，このような課題に対して少し違った角度からアプローチします。それは人がいつ，どこで，どうやって眠ってきたのかを文化誌の観点から振り返り，同時に私たちの眠りの未来を考えてみようというものです。

世界に目をやり，時代をさかのぼると，人の眠りには大きな多様性が認められます。源氏物語の時代と今の私たちとではずいぶんと異なる眠りが体験されていたはずです。このような眠りの多様性は，睡眠という人の行動が文化的な営みであるということを示しています。

「ねむり展」のもう一つの視点は「進化」です。ヒトとその祖先たちは，その進化史のなかで，それぞれの時間に，さまざまな場所で工夫をこらして眠ってきました。いま私たちが手にしている睡眠の多様性を，それが生まれてきた時代の流れに位置づけることによって，未来の豊かな睡眠を展望することもできるかもしれません。睡眠文化の多様性と進化について，睡眠文化と睡眠科学の研究者が協力し，地域研究・人類学・霊長類学のフィールドワークの成果を活用しながら，学際的かつ文理融合的視点から共同討議した成果をわかりやすく示します。

（総合博物館准教授　塩瀬隆之，
アジア・アフリカ地域研究研究科教授　重田眞義）

ベッドをつくるタンザニアのチンパンジー
（撮影：座馬耕一郎）

牧畜民の移動用椅子兼枕
（ウガンダ）

ゆりかご（ラップランド・スウェーデン）

京都大学研究資源アーカイブ

映像ステーション一時閉館のお知らせ

京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションは，平成 20 年（2008）11 月 1 日より一般公開されました（本誌 No.23 記事参照）。

映像ステーションは，京大の学問の伝統の一つといえる海外学術調査・学術探検登山の記録映画を常設上映し，京大の教育研究活動を紹介する映像コンテンツ等を視聴できる施設です。

このたび平成 28 年（2016）2 月 27 日（土）をもちまして一時閉館させていただくこととなりました。京都大学稲盛財団記念館より，京都大学総合博物館内（本部構内）へ移転し，京都大学の研究資源の閲覧の場として，また資料をめぐる交流の場としての機能をいっそう充実させ，平成 28 年 4 月以降にリニューアルオープンの予定です。

利用者の皆様には，たいへんご不便ご迷惑をおかけしますが，ご理解ご協力のほど，よろしくお願いいたします。

平成 27 年度「歴史の里」シンポジウム
「志段味大塚古墳の副葬品の調査・研究」
―古墳研究の最前線―

開催日：2015 年 10 月 10 日（土）

愛知県名古屋市に所在する志段味（しだみ）大塚古墳は，墳丘長 51 mを測る帆立貝式前方後円墳である。1923（大正 12）年，京都帝国大学の梅原末治によって埋葬施設が発掘調査されたが，これは東海地方における古墳の学術調査の嚆矢と位置づけられている。この調査で出土した五鈴鏡・鈴付鏡板付轡・鈴付杏葉・木心鉄板張輪鐙・三環鈴・帯金具・衝角付冑・小札甲・鉄鏃などの豊富な副葬品は，京都大学総合博物館が所蔵しており，５世紀後半の標識的な資料と評価されている。

志段味古墳群では，すでに史跡に指定されていた白鳥塚古墳に加え，2014（平成 26）年には志段味大塚古墳を含む６基の追加指定がなされている。2005（平成 17）年以降，史跡指定を目指して名古屋市教育委員会による範囲確認調査が進められた際，未報告の志段味大塚古墳出土遺物についても正式報告書の刊行が構想された。その実現を目的として，2014 年度から３年間にわたり，名古屋市教育委員会・京都大学大学院文学研究科考古学研究室・京都大学総合博物館が共同して調査・研究事業を進めている。

この事業の中間報告を兼ねて，2015（平成 27）年 10 月 10 日（土），名古屋市博物館において標記のシンポジウムが開催され，160 名以上もの方々に参集いただく盛況となった。副葬品目ごとに５名の研究者が講演し，最後にコーディネーターを加え６名で志段味大塚古墳をめぐる諸問題について討論した。これまでの調査・研究の到達点を整理し，今後の課題を明確にする貴重な機会となったといえる。シンポジウムの成果を踏まえ，2017（平成 29）年３月の報告書刊行を目指して，現在も調査・研究事業は継続中である。

（文学研究科助教　阪口英毅）

左：プログラム　上：会場風景
（名古屋市教育委員会提供）

戦後 70 年特別展
「人間らしく、戦争を生き抜く」

開催日：2015 年 11 月 25 日（水）～ 2016 年 1 月 10 日（日）

第二次大戦後 70 年の区切りに際し，収容所にとらわれ自由を奪われた人々の苦しみに思いを馳せ，人が人たる道を歩むことは全ての人に与えられた権利であることを知ってもらいたい――この考えのもと，赤十字国際委員会（ICRC）と共催で、写真展「人間らしく、戦争を生き抜く」を開催しました。

自由を奪われた捕虜や抑留者が置かれていた日常と彼らの苦難，そして収容所内でもとめていたものに光を当て，ICRC 本部（スイス・ジュネーブ）蔵書・アーカイブ局の保管記録から選んだ作品を展示しました。

特別展「京のイルカと学びのドラマ」付帯事業
「小中高生の探究活動発表大会　～新しい世界への扉～」
連続シンポジウム　京都から、「未来の子どもたち」へ贈る

開催日：2015 年 12 月 26 日（土）

日本最大級の「児童・生徒の学会」

2015 年 12 月 26 日，京都大学総合博物館が主催し，京都大学医学部芝蘭会館（山内ホール・稲盛ホール）にて，「小中高生の探究活動発表大会　～新しい世界への扉～」というイベントを行った。このイベントはタイトルの通り，全国の小中高校生たちの「探究活動」（探究的な学習）の成果発表大会であり，「児童・生徒の学会」という趣のものであった。発表方法は主にポスターセッション形式をとった。

「探究活動」はいわゆる，「自由研究」を想起させるものであるが，近年は文部科学省科学技術振興機構（JST）による「スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）」を始めとする科学教育事業によって，「児童・生徒版科学研究」を意味するものになってきている。

同種のイベントは京都大学においては教育学研究科の E.FORUM や高大接続科学ユニットの ELCAS などがある。また，外部に目を向けると，株式会社リバネスが主催するサイエンスキャッスルなどもある。

イベントの運営については，京都市立日吉ケ丘高等学校の生徒たちが「総合的な学習の時間」の一環として担い，京都大学教職実践演習の受講生たちがサポートするという入れ子構造の学びの中で実施した。これについては従来の「高大連携」を超えた「高大融合」という新しい連携として学内協力者から評価された。

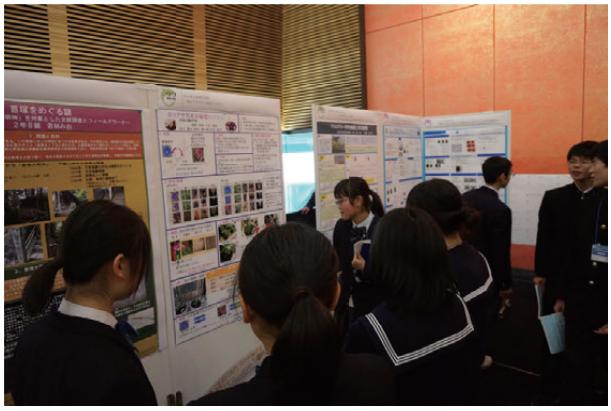
また，量的に見ても今回のイベントは展示ポスターが約 90 件，学生・生徒スタッフを含めた参加人数が約 550 人と日本最大規模のものになり，本邦の科学教育・本学の高大連携や社会連携事業においても後世に名を残す金字塔的イベントとなった。

新しい切り口から教育・研究者養成を語るシンポジウム

同イベントと並行して，芝蘭会館稲盛ホールにおいて，「連続シンポジウム　京都から、『未来の子どもたち』へ贈る　Vol.1」と題して 2 件のシンポジウムが行われた。1 つは「探究活動のカリキュラムモデルと学校文化の創成」であり，話題提供者の蒲生諒太が非常勤講師として勤務して以降，5 年以上関わっている京都市立紫野高等学校での，「総合的な学習の時間」再編を中心とした学校改革の報告であった。登壇者は紫野高校の紀平武宏，清水祐貴の両氏である。この報告では「研究指定校」以外の「普通の学校」における「ボトムアップの学校改革」像が従来の「トップダウンの学校改革」のカウンターとして提示された。また，教育研究者が学校現場に参与し，教員とともに学校教育における新しい文化を創造する事例として教育学的にも興味深いものとなった。

次に総合博物館教授大野照文が SSH 運営指導委員を務める京都市立堀川高等学校と共催して行った「研究から探究へ―大学と学校現場をつなぐ博士人材」である。堀川高校より飯澤功，株式会社リバネスより吉田一寛，奈良県立青翔高等学校・中学校より生田依子，東京工業大学附属科学技術高等学校より稲用隆一，紫野高校より池内秀和の諸氏が登壇され，蒲生が話題提供を行った。

これは 2014 年度特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて」実施に向けた取材において発見された学校現場で活躍する「博士人材」（博士号取得ないしは博士課程での研究・教育を受けていた人材）にフォーカスを当てたものであり，「ポスドク」にとって教育現場が，身につけた高度な能力を活かすことの出来る魅力的なフィールドであることを示し，「ポスドク問題」に一石を投じる内容となった。



ともに従来の教育学・研究者養成には見られなかった新鮮な切り口からのシンポジウムであり，教育・研究者養成における新しい研究パラダイムを提示したものとして，来場者から好評の声を頂いた。

社会に開かれた総合博物館，研究者のいる総合博物館の意義

今回のイベントは大野を中心とした総合博物館スタッフの高大連携・社会連携の蓄積，2014 年度実施の特別展「学びの海への船出～探究活動の輝きに向けて」の実績，そして，その中で育まれてきた学校現場とのつながりの上に成り立っているものであり，一朝一夕で行えるものではない。豊富な資料，研究者と研究ノウハウが蓄積された総合博物館が学内外の研究者から熟年，幼児と広い年齢層の市民まで，あらゆる人たちにとってのオープンな出会いの場として，永年，機能してきたことが，今回のイベントを成功に導いたのである。

今回のイベントは総合博物館の社会連携が教育学の分野でも研究創発機能を有することを示した。研究機関としての総合博物館の社会連携の意義を再確認する機会となるとともに，大学の初等中等教育への取り組みのあり方に一つの指針をも示すイベントとなった。

同イベント開催においては，船の科学館・海の学びミュージアムサポート及び京都大学 COC 事業（地 (知) の拠点事業）「COCOLO 域」よりご支援を賜った。心よりの謝意を評したい。

（教育学研究科博士後期課程　蒲生諒太，
総合博物館教授　大野照文）

【実施記録】

「小中高生の探究活動発表大会　～新しい世界への扉～」

共催：兵庫県立尼崎小田高等学校，奈良県立青翔高等学校，京都市立日吉ケ丘高等学校，京都市立堀川高校学校，京都府立海洋高等学校，京都市立紫野高等学校

後援：京都府教育委員会，京都市教育委員会，宇治田原町教育委員会，株式会社リバネス

協力：京都大学学術研究支援室，京都大学大学院教育学研究科 E.FORUM，ヴィッセン出版，株式会社ゴードー，船の科学館・海の学びミュージアムサポート，京都大学 COC 事業（地 (知) の拠点事業）「COCOLO 域」

（順不同）

口頭発表

○「出張　瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム」（主催：兵庫県立尼崎小田高等学校，京都大学総合博物館）

○「遺跡のモモ核から日本の桃のルーツと栽培化の歴史に迫る」（主催：奈良県立青翔高等学校，京都大学総合博物館）

○「海の学びと探究心―海洋ならではの挑戦」（主催：京都大学総合博物館　共催：京都府立海洋高等学校）

連続シンポジウム　京都から、「未来の子どもたち」へ贈る
研究現場と学校現場で創る「新しい学び」の世紀　Vol.1

主催：京都大学総合博物館

協力：船の科学館・海の学びミュージアムサポート，京都大学 COC 事業（地 (知) の拠点事業）「COCOLO 域」（順不同）

○「探究活動のカリキュラムモデルと学校文化の創成」（共催：京都市立紫野高等学校）

○「研究から探究へ　大学と学校現場をつなぐ博士人材」（共催：京都市立堀川高等学校）

国際シンポジウム

第 5 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム

開催期間：2015 年 12 月 15 日（火）～ 18 日（金）

2015 年 12 月 15 ～ 18 日の四日間にわたり，第 5 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム（The 5th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity）がタイ王国のチュラロンコン大学にて開催されました。このシンポジウムは，アジアにおける研究者と標本のネットワークを構築することを目指して京都大学総合博物館が主導する，日本学術振興会研究拠点形成事業 B. アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジア脊椎動物種多様性の研究者・標本・情報一体型 ネットワーク拠点」プロジェクトの一環として，2011 年より毎年アジア各国で開催されています。今回はアジア地域を中心に 13 ヶ国から 117 名の研究者や学生が参加し，陸上脊椎動物の多様性についての研究発表と情報交換が活発に行われました。

シンポジウムは 15 日夜にチュラロンコン大学自然史博物館（バンコク）にて行われた歓迎レセプションで幕を開けました。チュラロンコン大学理学部副学部長の Tirayut Vilaivan 氏をはじめとする開会の挨拶の後，参加者は展示室を観覧しながら和やかなムードで食事を楽しみました。この日は，Symposium on Primate Diversity in East and Southeast Asia が合同開催されたこともあり，レセプションには多くの参加者が集いました。

16 日と 17 日は会場をチュラロンコン大学の遠隔地調査・教育施設である Forest and Research Station（サラブリー県）に移し，二日間にわたって約 65 題の研究発表が行われました。研究内容は口頭発表とポスター発表として紹介され，アジア地域に生息する陸上脊椎動物についての分類・生態・行動・形態・発生・遺伝学など多岐にわたる研究成果が発表されました。16 日午前は開会の挨拶に始まり，京都大学理学研究科教授の疋田努氏による東・東南アジアにおける爬虫類の生物地理についての基調講演が行われました。午後には，両生類，爬虫類，鳥類についての口頭発表が学生や若手研究者を中心に行われました。17 日はカセサート大学獣医学部助教の Chanin Tirawattanawanich 氏による鳥類の保全に向けた生殖細胞の凍結保存についての基調講演から始まり，その後夕方まで哺乳類についての口頭発表が学生や若手研究者を中心に行われました。口頭発表が行われた会場にはポスター発表のスペースが併設されており，ポスターセッションのみならず休憩時間にも盛んな議論や情報交換が展開され，シンポジウム会場は終始にぎわっていました。17 日の最後には総合討論と閉会式が行われ，本シンポジウムは閉幕しました。

基調講演を行う疋田努教授

本シンポジウムではタイ王国の様々な野生動物を観察する機会にも恵まれました。16 日の夜には両生・爬虫類やコウモリの夜間調査が，17 日の朝にはバードウオッチングが，滞在していたステーション内にて行われました。最終日に当たる 18 日にはカオヤイ国立公園を訪問し，テナガザルやブタオザルなどの野生動物を観察するエクスカーションが催されました。

今回のシンポジウムは周囲を森で囲まれた大学施設がメイン会場であったこともあり，参加者が多くの時間を共有する機会に恵まれていました。そのため，研究に関する議論や情報交換を活発に行うことができただけでなく，お互いの信頼関係を成就することにもつながったのではないかと思います。本シンポジウムへの参加国数や参加者数は増加傾向にあり，今後も陸上脊椎動物の多様性研究における国際的なネットワークが発展することが期待されます。

（総合博物館博物館研究員　栗田和紀）

国際シンポジウム関連企画

タイ王国におけるワークショップ「陸上脊椎動物の野外調査」

開催期間：2015 年 12 月 19 日（土）～ 24 日（木）

京都大学総合博物館が主導する日本学術振興会（JSPS）研究拠点形成事業による国際シンポジウム The 5th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity に付随する形で，主催地のチュラロンコン大学がナーン県（Nan Province）に保有する研究林で 2015 年 12 月 19 日から 24 日の 6 日間にかけてワークショップが行われました。このワークショップではタイ王国，インドネシア，アメリカ，そして日本から参加した研究者，大学生，そして大学院生の約 20 名による野外での捕獲調査と標本作成を通じた研究交流会が行われました。

初日の 19 日はバンコクからナーン県の演習林まで車による移動の後，研究所の一室でチュラロンコン大学の教職員から演習林の説明を受けたのち参加者全員の自己紹介が行われました。

二日目の 20 日から 22 日にかけては日本の京都大学とタイ王国のチュラロンコン大学の教職員の指導のもとで，トラップの設置とルートセンサスによる両生類，爬虫類，哺乳類の捕獲が行われました。日中の主な作業はトラップの設置で，学生たちは基本的なトラップの扱い方を教わった後，トラップの細かい設置位置などの作業内容をきめるために互いに相談することで関係を深めました。日没後は両生類と爬虫類のルートセンサスが行われ，結果として比較的多くのサンプルと情報を得ることが出来ました。また，21 日，22 日には捕獲したサンプルの情報交換を行った後に標本作成を行うことで，学生に限らず，参加した研究者たちにとって異なる分野間の技術と知識を交換する良い機会となりました。

五日目にあたる 23 日には，学生が主体となって前日までの調査結果を総括し，哺乳類・鳥類・両生爬虫類の三班に分かれての成果発表会が開催されました。発表では調査によって確認された生物の種構成がわかりやすくまとめられ，またその結果に対して環境や季節的要素に着目した考察がなされました。調査期間が短く，得られた成果も限られていたにも関わらず，質の高い内容の発表であったと思います。発表会後は演習林を出て，ナーン県の市街地に移動し，文化学習を目的とした当地の史跡や寺院の視察が行われました。ナーン県周辺はかつて独立の国家であったほか，タイの中でもラオス国境付近に位置することから他国文化の影響を色濃く受けるなど，歴史的にみて興味深い地域であり，タイ王国の文化に対する理解を深めることができました。また市内の視察後は，ナーン県にチュラロンコン大学が所有する農業・畜産演習地にも足を運びました。こちらは演習林とは異なり，家畜や農作物の生産・品種改良などを目的とした施設です。そのような研究面で成果を上げつつ，地元であるナーン県の催しものに際しては，ブースを出展して活動内容を広報するなど，地域との密着を重視する姿勢をみることができました。こうして五日間の活動を終え，翌 24 日にバンコクへ戻りました。本ワークショップを開催したことで，各国の研究者・学生同士での学術的・技術的交流がなされ，さらにこうした個々人を繋ぐ国際的な人的ネットワーク形成の一助にもなったのではないかと思います。

（人間・環境学研究科研究員　江頭幸士郎，
理学研究科 博士後期課程　齊藤浩明）

京都大学 SPIRITS プログラム国際シンポジウム
「京都大学の埃及考古資料――大学博物館交流がもたらしたもの――」

開催日：2016 年 2 月 18 日（木）

京都大学総合博物館主催の国際シンポジウム「From Petrie to Hamada: Egyptian Antiquities of Kyoto University」が，京都大学融合チーム研究プログラム（SPIRITS）の支援により，2016 年 2 月 18 日に京都大学時計台百周年記念館国際交流ホールで行われました。当館には，京都帝国大学考古学教室の初代教授濱田耕作とロンドン大学教授フリンダース・ペトリーとの交流を通じて，1911 ～ 1931 年にイギリスから贈られたエジプトの考古資料が多数収蔵されています。これらの資料がもつ価値と，それをもたらした研究者間の交流がもつ重要性を主題に，本シンポジウムは開催されました。

当館収蔵エジプト資料に関する調査は足掛け 6 年にわたりました。シンポジウムでは，その間にご協力を賜った中部大学国際関係学部の中野智章准教授をはじめとする日・英・米の研究者 4 名を招聘し，加えて京都大学文学研究科考古学教室から 1 名，当館から 1 名の合計 6 名が登壇し，資料の価値と研究者の交流について多面的な観点から報告が行われました。

本学理事・湊長博副学長による歓迎の挨拶によって，シンポジウムは幕を開けました。続いて，各登壇者によって当該資料の概要と目録刊行の経緯やその意義が詳細に紹介されました。その中で，当該資料はエジプト考古学の研究において貴重であるのみならず，日本における考古学や博物館の発展を考える上でも重要な資料となることが議論されました。ペトリー教授の考古学研究や教育の手法が濱田教授を通じて日本の考古学史に与えた影響や，日本におけるエジプト考古学の受容が日本における近代性（Modernity）の形成にどのような影響を与えたのかといった興味の尽きない話題が提示されました。さらに，今回のシンポジウムに付随して行われた資料調査では，資料保存・修復の方法におけるパピルスと和紙の違いについて意見交換が行われたことが紹介され，当該資料が約 100 年前に結ばれた濱田・ペトリー両教授の交流を思い出す縁であるにとどまらず，現代でも新たな知的交流を生み出していく原動力となることもコメントされました。以上を踏まえ，当館の大野照文教授は，今回のシンポジウムを目標とするのではなく，むしろ出発点として，さらに研究者間の知的交流を進められなければならないことを結語として述べました。なお，シンポジウム予稿集には他に，資料分析に関する詳細な紙上報告 2 本が掲載されています。

シンポジウム参加者の集合写真

湊理事による歓迎の挨拶

なお，シンポジウム開催前の 2 月 16 日（火）には，吉田泉殿においてシンポジウム登壇者間での情報共有を目的とするミニセミナーが開催されました。また，2 月 15 日（月）・17 日（水）には，上述のように当館において海外招聘研究者による当該資料の調査が行われました。これらの機会を通じても，当該資料の重要性はもちろん，研究者や博物館における知的交流の重要性が活発に議論されました。

このシンポジウムは，総合博物館収蔵のエジプト考古資料という非常に具体的な素材をテーマに出発しています。しかし，結果としてもたらされた議論は，学際的であることはもちろん，科学史や博物館科学の根幹に触れる重要なものとなりました。日常に忙殺される中で，私たちは研究という営みや科学そのものがもつ意義や問題点に対して感受性を失っていないでしょうか。このシンポジウムはそうした自省を促す点でも意義深いものになりました。

（総合博物館特定助教　網島　聖）

定年退職を迎えるにあたり

「総合」博物館と異分野交流

1997 年，総合博物館に赴任したとき，当館が「総合」博物館であることをたいへん嬉しく思った。様々な分野から集まった同僚との異分野交流を楽しみ，そこから新たな研究領域を創成できるのでは，と期待したのである。

1999 年と 2000 年に高校生向けの学習教室を開催することになった。そのテーマに大文字山の地質，動物，植物，地理，歴史を取り上げた。準備作業を通じた文系・理系の教員の異分野交流の試みであり，皆で下見のために大文字山に登った。地質学専門の私は，それまで岩や鉱物しか見ていなかったが，当時博物館の教員だった吉川真司さんが，かつて大伽藍を誇った「如意寺」の遺構を案内してくれたり，また尾根道のでこぼこが山城の空堀の跡だと教えてくれたりと，異分野交流を楽しんだ。

総合博物館がお手伝いをして，京大に異分野交流の永続的推進母体が作られた例もある。2008 年の企画展「京の宇宙学―千年の伝統と京大が拓く探査の未来」の準備をきっかけに，それまで交流のなかった京大の宇宙研究者が集まって「宇宙総合学研究ユニット」が生まれた。環境・エネルギー科学，医学・生命科学，情報科学，人文社会系学問まで幅広い分野を対象とし，2015 年度現在，専任教員・研究員，併任教員ら合わせて約 90 名が在籍，活発に活動している。

総合博物館でも最近数年異分野交流の試みが活発化している。その一つが京都大学の「知の越境」融合チーム研究プログラム（SPIRITS）の一環としての「アジアの標本・人・情報をつないで京大が創成する国際博物館科学」プロジェクト（2013 ～ 2014 年度）である（妹尾 , 2015）。標本・人・情報をつないで，新たな学術領域「博物館科学」を構築することが狙いである。学振のアジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」（コーディネーター本川雅治，2011 ～ 2014 年度），2012 年に総合博物館が主催した環太平洋大学協会

大文字山の科学下見（1999 年 7 月 21 日）

宇宙ユニット立ち上げゼミ

（APRU）第 1 回大学博物館研究シンポジウムなどを通じて蓄積した経験と国際ネットワークが基盤となっている。

最近「大学の生き残り」という言葉を頻繁に聞くようになった。21 世紀は，環境，資源，そして国際紛争と，自然や人類にとってきわめて多くの，そして複合的な課題が山積する時代である。もはや個別科学だけでは，これらの課題に太刀打ちできなくなった大学の狼狽がこの言葉に集約されているのだろう。大学は，分野を超えて知恵を糾合し，人類社会の生き残りと地球の保全に貢献するべきである。こうして，社会から再び存在意義を認知されること以外に大学の生き残りはないと私は思う。

総合博物館は，幅広い個別学術領域からスタッフが集まり，しかも小規模ゆえに，スタッフの間の本質的な意思疎通と様々な試行錯誤を行うことが容易である。さらに，展示の企画や共同研究を通じて学内外ともつながりが深い。このメリットを活かした取り組みが SPIRITS プロジェクトをはじめとする異分野交流の成果を生み始めているのだと思う。幸いなことに，総合博物館では，毎週土曜日に開催の「京都大学子ども博物館」のスタッフとして全学から集う優秀な学生や院生達の間にもごく自然な異分野交流が生まれており，次世代にも総合博物館の異分野交流の精神は受け継がれるものと期待できる。

私は，この 3 月で定年，館を去るが，これからも総合博物館が，異分野交流のネットワークをさらに学内学で，国内学で広げられ，真の意味での「大学の生き残り」＝「人類社会の生き残りと地球の保全」に大きく貢献されることを期待する。

参考文献

妹尾裕介（編）（2015）挑戦する大学博物館－学術標本・人・情報をつなげる博物館科学の創成－ , 134pp.

（総合博物館教授　大野照文）

外国人研究員（客員准教授）2015 年 11 月 1 日～ 2016 年 1 月 31 日

郭美芳 Kuo, Mei Fang（台湾・國立成功大學博物館 National Cheng Kung University Museum）

Looking at Historical Objects, Thinking about rising of University and its Museum

First of all, I would like to express my sincere thanks to Kyoto University Museum for the provision of a friendly space and the opportunities for me to freely explore its precious collection items, utilize its equipment and facilities during my visit study at the Museum between 1 November 2015 and 31 January 2016.

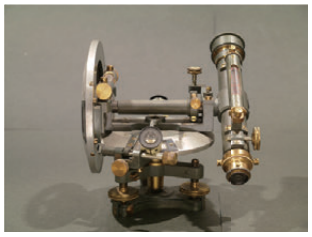
I spend part of my time in the “Maps and Ethnological Document Laboratory Exhibition Room” and the “Japanese History Document Laboratory Exhibition Room”, examining their Taiwan collections. Except for the varied special objects from northeast and southeast Asia, I also encountered some 2500 precious ground glass photographic plates taken in the early twentieth century, and some delicate German-made measuring equipment. This report tries to discuss the developmental characteristics of the University and its museum with a special focus from these two Rooms.

The Taiwanese collections in the two rooms were modest in quantity but quite high in quality. Except for the body decorations and necessities collections, others such as cutlery of ethnic groups of Paiwan, Atayal, and Tao are mostly typical boutique of the tribes and of very high quality. There were also items of Kris cutlery marked as collected from Taiwan which could be considered as evidence of the interaction between Taiwan aborigines and other Southeast Asian peoples in early ages.

Atayal cutlery

Kris cutlery collected from Taiwan

In the modest Maps and Ethnological Room, there was a big collection of precision measuring instrument, both in terms of quantity and variety, and most of them were very high in quality too. Those highest quality German-made instruments had not only supported research and study activities in the University but also became the researched objects of Shimadzu Factory which then modified them and transformed the learned knowhow into Japanese precision instrument industries. Shimadzu Factory did not only manufacture precision measuring instruments, its ethnographic figure models were also preserved in the Room. These sets of ethnographical models cover not only the peoples in the territories of the contemporary Japanese Empire, including Taiwan and Korea, but also other ethnic groups in East Asia, Africa and South America. The vividness and the precise characteristics reflected from these figure models reached a very high level that one cannot imagine such achievements could have happened without the intensive interactions between academic research and industrial capacity.



Measuring instrument produced by Germany

“Scale of Hardness” produced by The specimen department of Shimadzu Factory

Atayal figure models produced by Shimadzu Factory

Groups of ethnographic figure model produced by Shimadzu Factory

The two collections mentioned above indicate the potential and importance of linking university education and regional industrial development. Such kind of fusion between different disciplines and collaboration between academia and industrialists had contributed to the strength and prosperity of the regional economy, and of course became one of the supportive forces for the pre-war Japanese power.

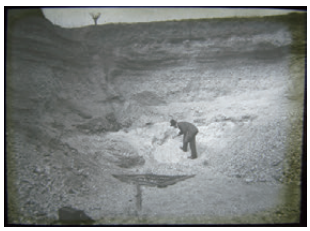
The ground glass photography collection at the Room was quite impressive. Total amount of the collection reached some 2500 items, with different size and specifications, negative and positive; most of them were taken between 1900s and 1940s. The red characters on the side of one glass plate marked " 土人ト三高生徒 (The Local people and

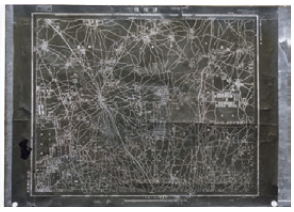
Third High school students)" therefore can be speculated that the earliest production year was before 1906.

The characters on the left hand side of glass plate marked " 三高生徒 (The Third High school students)"

This collection can be divided into three categories: teaching materials, collection records of " 陳列館 (Display Gallery)", and field survey records.

1. The first category is quite numerous, includes some imported slides of the European and American "advanced" city images, but the majority items are copies of various maps published by the Army War Colleges and copies of images from publications of Europe, encompassing human images, geographical features, new urban planning, industrial facilities, ports, etc.
2. The second category is the pictures concerned to the university museum predecessor – the " 陳列館 (Display Gallery)".
3. The third category comprised the results of various field surveys conducted by the professors and students of the " 文科大學 (Liberal Arts College)"; These are the most unique and valuable artifacts. The scope of the field survey covered a very wide range of natural features and human activities, including geological surveys, post-earthquake surveys, mining activities, railroad systems, industrial facilities, folklore activities, fishing and daily life activities, etc., and these studies were conducted both domestically and internationally. This collection indicated that the study of geography covered not only natural geography and measuring techniques, but also humanity, history and ethnography; they characteristically reflected the scientific attitude and humanistic spirit of the academia, and the idea of education with both solid theoretical grounding and practical application. A good example is the picture which recorded two persons wearing traditional clothes and standing on a seemingly normal and small bridge of approximately six meters long; a careful examination would tell that the small bridge represents the state-of-the –art iron truss structure of the era.





Copy from the Map was made by Army War Collage

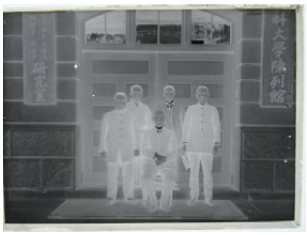
Photos of field survey.
(up: positive; down: negatives)

Survey of Korean seaside fishing

An iron truss bridge

Post-earthquake investigation

I was deeply touched by the collection at Kyoto University Museum, and recognized some of the philosophies behind the establishment of the department and the rise of a great university museum especially through the looking glass of the Room. Unlike most of the other "specimen room" founded in university departments which mainly served the specific disciplines in the early twentieth century, the "Display Gallery(陳列館)" at Kyoto University was an integrator that had been striving to combine findings and collections of different disciplines. I learned the far-sightedness and breadth of the Museum (Display Gallery) founders from the collection encountered during this period of stay with the Museum, and deeply appreciated to all those who made this study trip possible!



Professors on the doorway of the Display Gallery

Collection of Display Gallery and professor

総合博物館日誌（平成 27 年 11 月～平成 28 年 2 月）

展示

実施日	名称
10 月 7 日（水）～ 11 月 8 日（日）	平成 27 年度特別展「研究を伝えるデザイン　研究者の思いをかたちにする工夫とこだわり」
11 月 5 日（木）	関連企画 【トークイベント】「大学とグラフィックデザイン（とデザイナー）」 奥村昭夫（グラフィックデザイナー／学術情報メディアセンター客員教授）
11 月 7 日（土）	関連企画 【トークイベント】「海外教育研究機関での視覚コンテンツ制作支援」 山邉昭則（東京大学大学院教育学研究科・教育学部特任助教）
11 月 8 日（日）	関連企画 【トークと 4 次元デジタル宇宙シアター解説上映】「京都大学花山天文台での天文教育普及活動～天文学研究を社会へ伝える～」「4 次元デジタル宇宙シアター：太陽フレアのしくみ」 青木成一郎（理学研究科附属天文台 4 次元デジタルシアター担当）
11 月 25 日（水）～ 平成 28 年 1 月 10 日（日）	戦後 70 年特別展 「人間らしく、戦争を生き抜く」“The Daily Life of Prisoners during World War Ⅱ”
12 月 10 日（木）	関連企画 【Gallery Session1】「戦時下における捕虜 ―歴史的な観点から」 吹浦忠正（評論家／元埼玉県立大学教授）
12 月 17 日（木）	関連企画 【Gallery Session2】「中東で何が起きているのか ―紛争下における国際人道法の役割」 濱本正太郎（法学研究科教授）， ピーター・ネルソン（在京スイス大使館公使）
平成 28 年 1 月 27 日（水）～ 3 月 20 日（日）	平成 27 年度特別展　京大と学校現場を紡ぐアクティブラーニングをめぐる航海日誌「京のイルカと学びのドラマ」
平成 27 年 12 月 26 日（日）	関連企画 【発表大会】「小中高生の探究活動発表大会」～新しい世界への扉～ 各校代表者 【連続シンポジウム Vol.1】京都から、「未来の子どもたちへ」贈る　研究現場と学校現場で創る「新しい学び」の世紀 シンポジウム 1　「探究活動のカリキュラムモデルと学校文化の創成」 紀平武宏（京都市立紫野高等学校教諭），蒲生諒太（教育学研究科／総合博物館），清水祐貴（京都市立紫野高等学校教諭） シンポジウム 2 「研究から探究へ　大学と学校現場をつなぐ博士人材」 飯澤功（京都市立堀川高等学校教諭），吉田一寛（株式会社リバネス社長），生田依子（奈良県立青翔高等学校・青翔中学校教諭），稲用隆一（東京工業大学附属科学技術高等学校教諭），池内秀和（京都市立紫野高等学校教諭）
平成 28 年 1 月 31 日（日）	関連企画 【海の自然史シンポジウム】学術・地域・次世代をむすぶ大学博物館：京のイルカと海から考える、研究の「縦糸－横糸」 第 1 部：「イルカを学ぶ」 荒井修亮（フィールド科学教育研究センター教授），松岡廣繁（理学研究科助教）；天野雅男（長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科教授），木村里子（フィールド科学教育研究センター研究員），植田啓一（沖縄美ら島財団総合研究センター獣医師），古田正美氏（鳥羽水族館顧問）；荒井修亮 第 2 部：「イルカと学ぶ」 松岡廣繁，丸山啓志（理学研究科／総合博物館）；松岡廣繁，木村敏之（群馬県立自然史博物館主幹），森阪匡通（東海大学創造科学技術研究機構特任講師），中島幸一（京都府立海洋高等学校教諭）；大野照文（総合博物館教授）
2 月 10 日（水）～ 4 月 17 日（日）	平成 27 年度特別展 「文化財発掘Ⅱ」 ―京大キャンパスの弥生時代―

イベント

実施日	名称
11 月 7 日（土）	第 10 回ホームカミングデイ

12 月 6 日（日）	京都千年天文学街道・第 23 回アストロトーク 講演：「クリスマスはいつ？」作花一志（京都情報大学大学院）　4 次元宇宙シアター：「3D メガネでみる宇宙のすがた～金星と探査機『あかつき』～」青木成一郎（理学研究科附属花山天文台）
2 月 10 日（水）	「iPS 細胞とともに歩む生命倫理」2015 年度上廣倫理研究部門年次報告会
2 月 10 日（水）	第 3 回研究資源アーカイブ研究会「さようなら映像ステーション，こんにちは映像ステーション：稲盛財団記念館から総合博物館へ」 I. 午前の部 座談会 II. 午後の部 講演／コメント・ディスカッション 講演「アーカイブ事業を動かす原動力としての『教育』活動の可能性」山下俊介（北海道大学総合博物館助教）　コメント「広島の原爆に関連する映像・音声資料について」（アーカイブ資料管理における映像ステーションの位置）久保田明子（広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部助教）　コメント「映像ステーションでの日常またはイベントによる来館訴求の努力」神近智子（総合博物館事務補佐員），平澤美保子（総合博物館事務補佐員），神谷俊郎（南西地区 URA 室 URA）　報告「映像・音声資料保存実践のためのガイドライン（翻訳資料）の紹介」浅川友里江（学術情報メディアセンター教務補佐員），鈴木美智子（明石市立文化博物館学芸員），戸田健太郎（総合博物館研究員）　展望「新しい映像ステーションの概要」永益英敏（総合博物館教授），元木環（情報環境機構助教）
2 月 17 日（水）	アストロH打ち上げパブリックビューイング
2 月 18 日（木）	ＳＰＩＲＩＴＳ国際シンポジウム「京都大学のエジプト考古資料」大学博物館交流がもたらしたもの 「『京都大学総合博物館エジプト考古学資料目録』の刊行」阪口英毅（文学研究科助教） 「京都大学総合博物館エジプト考古学資料の位置づけ」中野智章（中部大学国際人間学研究科准教授） 「Artefacts of Excavation: the international distribution of finds from British excavations in Egypt.」Alice Stevenson（Curator, Petrie Museum of Egyptian Archaeology, University College London） 「京都大学総合博物館所蔵コプト織物の分析」横山 操（総合博物館教務補佐員） 「Old and new excavations at Naukartis and the significance of the Kyoto University Museum collection.」Ross Thomas（Project Curator: Naukratis Project, Department of Greece and Rome, The British Museum） 「Quotidian treasures: The papyrological collection of the Kyoto University Museum.」Todd Hickey（Associate Professor/Director, The Center for the Tebtunis Papyri, University of California, Berkeley）
2 月 28 日（日）	元素検定＠京都 2016 春

レクチャーシリーズ

実施日		内容・テーマ	講演者
11 月 14 日（土）	No.136	計算するというしごと	杉本　舞（関西大学社会学部准教授）
12 月 12 日（土）	No.137	「量子」の世界はどのように生まれたのか	小長谷大介（龍谷大学経済学部准教授）
平成 28 年 2 月 27 日（土）	No.138	大野照文のここだけのはなし	大野照文（総合博物館教授）

博物館セミナー

実施日		内容・テーマ	講演者
11 月 13 日（金）	第 70 回	戦国末期・近世初期における歴史像の脱構築を目指して　―特に人物評伝を書くために―	李　啓煌（総合博物館客員教授／韓国・仁荷大学校文科大学教授）
12 月 11 日（金）	第 71 回	Characteristic of Kyoto University museum collections　Specialized in Taiwan collections 京都大學典藏品特色（特論臺灣典藏品）	郭　美芳（総合博物館客員准教授／台湾・國立成功大學博物館助理研究員）
平成 28 年 1 月 8 日（金）	第 72 回	熱帯雨林における狩猟採集民の植物知識 ―バカとプナンの比較―	小泉　都（総合博物館／日本学術振興会特別研究員）
2 月 12 日（金）	第 73 回	タイの大学博物館から学術資料の意義を考える	本川雅治（総合博物館准教授）

入館者数

8,793 名 （うち特別観覧　61 団体、2,039 名）

発行日　2016 年 3 月 24 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/